

戦後70周年、市制45周年

～ご自由にご使用ください。～

沖縄戦の真相にふれるたびに
戦争というものは
これほど残酷で、これほど活版にまみれたものはない
と思うのです

この、なまなましい体験の前では
いかなる人でも
戦争を肯定し美化することは、できないはず

戦争をおこすのは、たしかに、人間です
しかし、それ以上に
戦争を許さない努力のできるのぞ
私たち、人間、ではないでしょうか

戦後このかた、私たちは
あらゆる戦争を増やし
平和な国を建設するわば、と思いつづけてきました

これが
あまりに大きすぎた代償を払って得た
ゆるぎのない平和でない
私たちの信念なのです

沖縄県立平和祈念資料館（旧館）運営協議会 作

参考資料：「沖縄県平和祈念資料館 総合案内（2004年3月 第4刷 発行：沖縄県平和祈念資料館）」より



1. はじめに

沖縄戦では日本史上まれにみる、住民を巻き込んだ地上戦が行われ、20数万人もの^{とうと}尊い命が奪われ、多くの県民が犠牲^{ぎせい}となりました。

その沖縄戦が終結してから70年が過ぎて、戦争体験を知らない世代が増えていくなかで、戦跡等の風化が進みつつあります。

沖縄戦の悲惨^{ひさん}さを伝え、二度とこのような戦争を繰り返さないよう、人々の記憶のなかから沖縄戦の惨禍^{さんか}を忘れることなく語り継ぐため、本市では平成8年度から「中学生平和交流事業」を開始し、多くの中学生が参加し、戦争の悲惨と平和の尊さ等多くの事を学ぶ機会となりました。

「中学生平和交流事業」開始から20年を経た今年は、終戦70周年の節目にあたる年となっており、改めて、市民、県民の平和への願いを風化させることなく、次代に引き継ぐ取り組みを進めていくことが重要です。

本土から多くの来訪者が沖縄県を平和学習の地として訪れ、県内各地の旧避難壕や慰霊碑、沖縄県平和祈念資料館が平和学習の素材として活用されています。浦添市内でもNPO法人浦添市歴史ガイド友の会等により、チヂフチャーガマや前田高地等を訪れ、戦争の悲惨と平和の尊さを学ぶ場となっています。

そうした平和学習を展開するなかで、戦時中の状況や今日の平和活動等を伝える資料の提供は必要であるものの、「浦添市史」等から抜粋して、その都度作成している状況となっています。そのため、既存資料を活用しつつ、関係者から協力を得ながら、市内の戦跡（ガマ）を中心にこのガイドブックを作成しました。このガイドブックが子どもたちをはじめ、多くの方々に活用されることを希望します。

浦 添 市 「平和都市宣言」

戦争の惨禍を防止し、恒久平和と安全を確立することは人類共通の願いである。

しかるに近年、世界各国においては、依然として軍備の拡大が続けられ、世界の平和に深刻な脅威をもたらしていることは、全人類等しく憂うところである。

沖縄県は、第二次世界大戦において我が国唯一の地上戦が展開されたところであり、激しい攻防戦によって、多くの尊い人命を失ったばかりか、数々の文化遺産をはじめ一木一草にいたるまで焼きつくされてしまった。私たちは、浦添のこの地で二度とあのいまわしい戦争の惨禍を繰り返してはならない。

ユネスコ憲章前文では、「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」、「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。」として文化的相互理解の必要性を強調している。いふなれば、人、文化、教育、経済、技術など、あらゆる分野の国際交流を進め、相互理解と共存意識を高めることが平和の維持に最も必要なのである。

幸い我が浦添市には、かつての古琉球の時代において、中国をはじめ東南アジア諸国などとの貿易を介した国際交流の歴史的体験がある。

先人達のその気概は、私たちが誇りとするものであり、後世に継承するに値するかけがえのない遺産である。その上、アセアン諸国への技術協力を目的とする沖縄国際センターが立地するなど、国際性豊かな文化都市たるに最もふさわしい地域環境となってきた。

よって我が浦添市は、文化行政と国際交流を積極的に推進し、世界の人々と手を携え、日本国憲法に掲げられた、恒久平和の確立と全人類の福祉の増進に貢献することを決意する。

ここに、浦添市が永遠に「平和都市」たることを表明し宣言する。

1986年3月12日

浦 添 市 「核兵器廃絶宣言」

人類はかつてないものを手にしてしまった
生きとし生ける生物を絶滅させる廃物を
その正体をヒロシマ・ナガサキで見た
幾たびとなく起こした患かな戦争
武力に頼る限り
核兵器を使わないという保障はない
歴史の真実を個に刻むならば
患かな戦争に終止符を打ち
人類の危機を救うことはできるはずだ
「核兵器廃絶」 私たちは訴える
種と文明の存続のため
世界の恒久平和のために

1996年3月28日

8. 市内の慰霊塔・碑

No.	塔又は碑名	建立場所	管理者氏名
①	浦和之塔	字仲間城原500	浦添市
②	前田高地平和の碑	仲間2-52	山3475部隊第2大隊遺族会
③	第6師団独立歩兵隊第21大隊3中隊終えん之地	伊祖公園内（西側）	(財)沖縄戦没者慰霊奉賛会
④	安守之塔	安波茶2-7-1	安波茶自治会
⑤	鎮魂の碑	城間1-7-9	城間自治会
⑥	芳魂の碑	屋富祖2-25-2	屋富祖遺族会
⑦	麗魂の碑	宮城2-28-6	宮城自治会
⑧	戦没の塔	仲西1-8-8	仲西自治会
⑨	郷守の塔	大平2-15	浦添市字小湾共有地地主会
⑩	勢理客慰霊塔	勢理客2-12-23	勢理客遺族会
⑪	慰霊之碑	沢岬1233	昭和薬科大学附属高等学校・中学校



2. 活用のための注意事項

<マナーを守りましょう>

- ガイドや引率者の指示に従いましょう。
- 1人又は自分勝手な行動はやめましょう。
- 危ない場所に近づくのはやめましょう。
- 持ち込んだものはすべて回収し、持ち帰りましょう。
- 現地から鍾乳石等を持ち出したり、傷や破損する行為はやめましょう。
- 現地での事故・ケガ等は、自己責任となりますので、以下の注意事項を十分に注意して下さい。

<現地での注意事項>

- 草むらや洞窟内には、毒蛇ハブ、有害なムカデ、有害な植物等が棲息している可能性があります。そのため、長袖、長靴、手袋、防止等、環境や行動に応じた服装で出かけましょう。
- 毒蛇ハブ、落盤・落石、頭上の岩等に十分気を付けましょう。
- 緊急事態に備え、救急の場合の連絡先を確認しましょう。

～ 目 次 ～

1. はじめに	1
2. 活用のための注意事項	2
3. 沖縄戦について	3
4. 米軍の沖縄本島上陸	4
5. 「浦添」の被害状況	6
6. 市内の戦跡(ガマ)	7
7. 各戦跡(ガマ)の紹介	11
8. 市内の慰霊塔・碑	17

3. 沖縄戦について

明治政府は、琉球王府に対して、武力を背景にした「琉球処分」を断行しました。それに伴い沖縄県は、皇民化政策によって急速に日本化を進めてきました。第一次世界大戦後、日本経済は戦後恐慌に陥り、沖縄経済もソテツ地獄といわれる窮状に陥りました。さらなる不況のため海外への移民や本土への出稼ぎが急増しました。

一方、近代化を急ぐ日本は、富国強兵策により軍備を拡張し、近隣諸国への浸出を企ていました。満州事変、日中戦争、アジア・太平洋戦争へと拡大し、ミッドウェー沖の海戦（1942年6月）で敗れてから形勢がかわり、沖縄は15年戦争の最後の決戦場となりました。

1944年7月に老幼婦女子の疎開命令が出され、九州・台湾への疎開計画が建てられた。同年8月、那覇港から鹿児島に向けて出発した疎開船3隻のうちの1隻「対馬丸」は、奄美大島の近くにある悪石島付近で、米軍潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、多くの人々が亡くなりました。沖縄全域で陣地づくりや飛行場建設等が進められるなかで、1944年10月10日、米軍の機動部隊は、午前6時ごろから夕方にかけて、沖縄の軍事施設を中心に激しい攻撃を加えました。

1945年、米軍は艦船1,400隻、将兵183,000人からなる大舞台で、さらに約54万人を従え、米軍としてもこれまでの戦闘部隊の中でも最大規模の兵力を沖縄作戦に投入してきました。

ところが、日本軍の兵力は10万余ということでありましたが、その約3分の1は、防衛招集等による現地徴集でした。

また、米軍の戦力は兵員のみならず、日本軍よりもはるかに優れた各種近代兵器と圧倒的量の弾薬類で装備している一方で、日本軍は線路を溶かし、戦国時代に使用していたのと同様な銃を急造して、戦力を補っており、近代兵器に素手で立ち向かう状況もありました。

日本軍としては、首里司令部を主陣地として、自然洞窟、墓などを利用して複廊縦深陣地を浦添、西原方面に張りめぐらし、そこで敵を攻撃し、持久戦に持ち込む作戦をとっていました。

したがって米軍は、日本軍の反撃をほとんど受けることなく無血上陸し、4月5日までには本島中部一帯を制圧し、読谷村比謝に海軍軍政府を樹立宣言しました。そして、占領地域に戦闘員、非戦闘員別に収容所を設け、前線から次々に避難民などが保護されて送り込まれてきました。

参考資料

「沖縄県平和祈念資料館 総合案内(2004年3月 第4刷 発行:沖縄県平和祈念資料館)」

「浦添市史(第5巻・資料編4戦争体験記録)(1984年 編集:浦添市史編纂委員会 発行:浦添市教育委員会)(※一部修正)

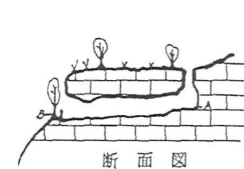
伊祖のトーチカ

形態：構築物／種別：トーチカ

【概要及び特徴】

石灰岩の断崖の中腹から入ると、5～6mの奥行きがあり、床面はフラット、高さ1.6m、幅1.5m内外。奥の突き当たりに上部に開いた口の周辺はコンクリートで補強されている。

口の北側に接する岩には嘉数方面へ向けて銃眼が設けられている。



断面図



平面図

<大城・新垣 原図>

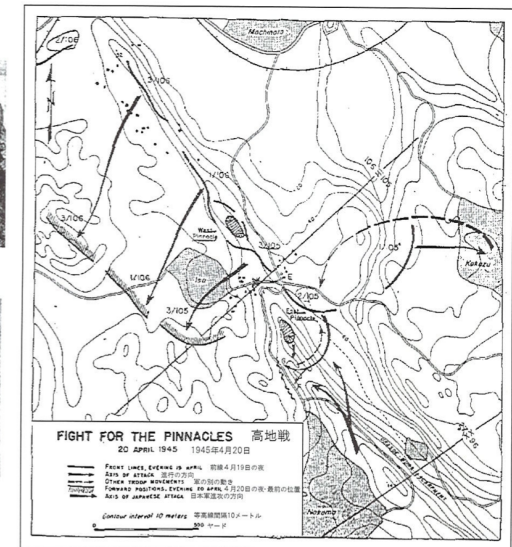
0 5 10 (m)



銃眼より壕の上部の眺め



壕内部から外への眺め



参考資料

「浦添市内の戦跡に関する資料(市内の戦跡の実態調査)(平成8年 浦添市教育委員会)」

「米軍公刊戦史『沖縄：最後の戦い』」

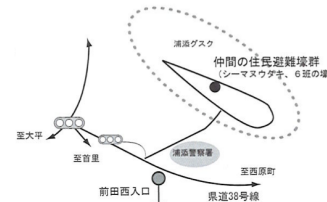
仲間の住民避難壕群 (シーマヌウタキ、6班の壕)

所在地：
仲間(国指定史跡浦添城跡内)

形態：人工(一部自然)壕／種別：住民避難壕＋陣地／市指定史跡(記念物、史跡)

【概要及び特徴】

シーマヌウタキと呼ばれる洞穴を中心として、その周辺に散財する壕群である。石灰岩の崖下の洞穴を利用した壕で、落盤のため全体像は不明である。戦時中、字仲間の住民が避難した壕で、多くの人の命が助かった場所であり、一部は旧日本軍が利用していたとされている。



シーマヌウタキの開口部



シーマヌウタキ付近



6班の壕(クチグウガマ)



6班の壕(ユビヌクウガマ)

参考資料

「浦添市仲間地区まちづくり調査報告書(平成15年3月 浦添市都市計画課)」
「浦添市内の戦跡に関する資料(市内の戦跡の実態調査)(平成8年 浦添市教育委員会)」

4. 米軍の沖縄本島上陸

4月1日、午前8時30分、米軍は沖縄本島の中部西岸(現在の読谷村・嘉手納町・北谷町)への上陸を開始しました。そこは、大軍が一挙に上陸するには最適な場所であり、日本軍の北(読谷)・中(嘉手納・北谷)の両飛行場があったからです。

沖縄守備軍は、最精鋭部隊の第9師団が台湾に引きぬかれたこともあって、水際作戦から持久戦へと作戦を切りかえていたのです。そうすることによって、本土決戦準備の時間かせぎをすることができたからです。また、南部(具志頭港川)から上陸しようとみせかけていた(陽動作戦)米軍に幻惑され、中部戦線に十分な対応ができなかったことにも原因がありました。

いずれにせよ、沖縄守備軍が米軍の無血上陸をゆるし、簡単に北・中両飛行場を明けわたしたことに驚きました。第32軍・沖縄守備軍の本来の任務は、南西諸島を拠点に航空作戦によって南西諸島周辺の制空権を奪還することだったからです。しかし、強力な1個師団を引き抜かれ、わずか10万余の弱小兵力ではいかんともしがたく、作戦変更は大本営も認めていることでした。そのことにより、沖縄諸島では住民を巻き込んだ激しい地上戦が展開されることになったのです。

参考資料

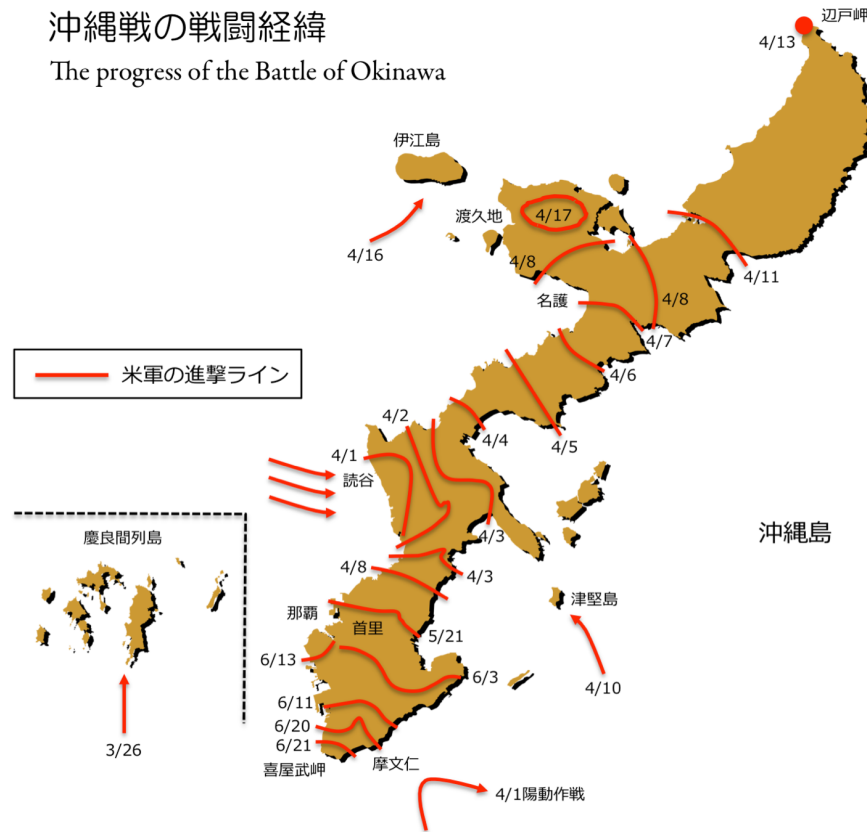
「沖縄戦から何を学ぶか(戦争を知らない世代のための平和学習書)」
(2002年9月 第4刷 編集:沖縄県教育文化資料センター 発行:合資会社 沖縄時事出版)(※一部修正)



小湾の防波堤で待機する米軍戦車(「日本軍最後の戦い」より)

沖縄戦の戦闘経緯

The progress of the Battle of Okinawa



参考資料：「沖縄県平和祈念資料館 総合案内（2004年3月 第4刷 発行：沖縄県平和祈念資料館）」より

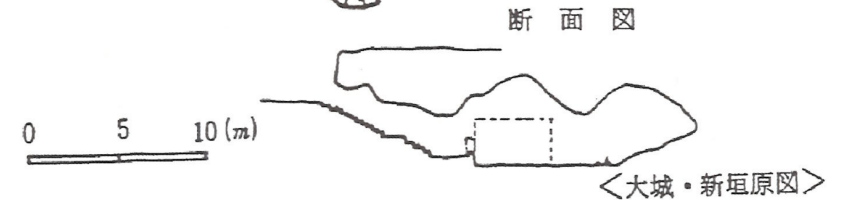
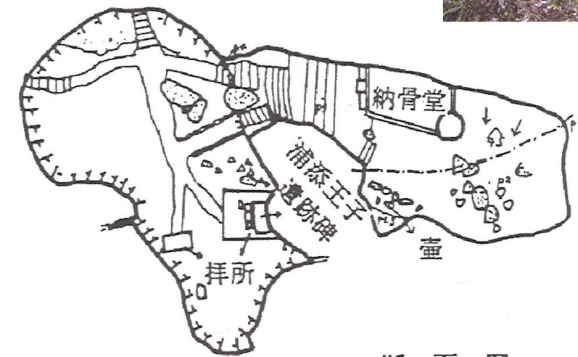
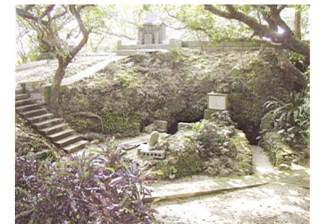
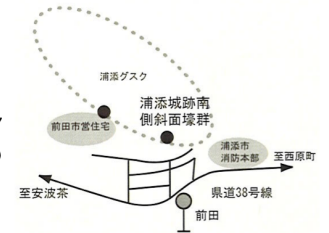
ディーグガマ

形態：人工（一部自然）壕／種別：住民避難壕＋陣地

【概要及び特徴】

浦添城跡内の浦和の塔の下にある洞穴である。洞口は、直径約12mの陥没ドリーネ内に開口している。天井高4～5m、延長距離約20mである。5千名余の遺骨があったが、現在は摩文仁の丘に遷骨している。

所在地：
仲間（国指定史跡浦添城跡内、旧浦和の塔の下）



参考資料

「浦添市の洞穴調査報告書（昭和57年3月 浦添市教育委員会）」
「浦添市内の戦跡に関する資料（市内の戦跡の実態調査）（平成8年 浦添市教育委員会）」
「浦添市仲間地区まちづくり調査報告書（平成15年3月 浦添市都市計画課）」

まえだこうちごうぐん 前田高地壕群

所在地：
仲間（国指定史跡浦添城跡内）

形態：人工壕 ／ 種別：陣地

【概要及び特徴】

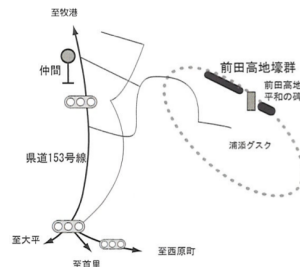
現在壕は、3ヶ所残っているが、内部は落盤や土砂の堆積などが激しい。また、壕の北側出入口付近は、碎石により削り取られている。

1944年8月19日以降に中部戦線の防衛ラインの一角として、第62師団独立混成第63旅団が構築したものと思われる。

壕内にも複数の坑道を走らせ、壕口が1つ破壊されても問題がないように、壕口も複数設けていた。また、内部は迷路のように坑道を走らせていた。壕の1つは、浦添城跡の南側斜面に所在した壕とつながっていたことが兵隊の手記により確認できる。このことから、当壕群は、第32軍の陣地構築の典型的な方法を確認できるものであるといえる。

当壕群周辺には、第62師団の独立混成第63旅団が配置されていた。当壕群周辺が最前線となるのは、4月20日前後である。

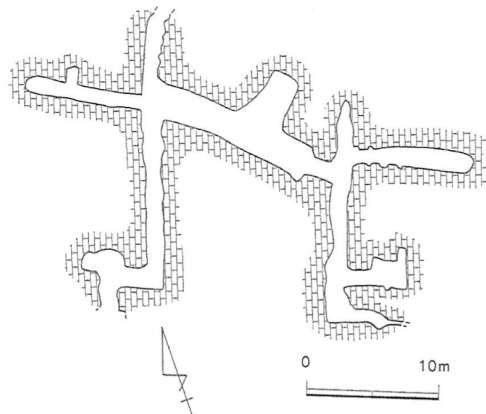
4月27日、日本軍は浦添城跡の頂上及び南側は確保できていたようだが、北側斜面は米軍に制圧されたと思われる。



坑木跡の残る壕内



壕内の落盤跡



前田高地平面遺構略図

参考資料

「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅱ)-中部編-」(平成14年3月、沖縄県立埋蔵文化センター)

5. 「浦添」の被害状況

激戦地だった浦添

1945年4月1日、米軍は北谷町から読谷村の海岸に上陸した後、軍の大部分が首里・那覇を目指して進攻してきました。日本軍は、現在の宜野湾市にある嘉数高地と浦添グスク一帯（前田高地）に防衛戦を張り、進軍してくる米軍を迎え撃ちました。そこで、日本軍と米軍の激しい攻防戦が繰り広げられ、沖縄戦最大の激戦地となりました。地上では米軍の戦車や装甲車が進攻、おびただしい数の銃弾が飛び交い、洞窟や壕には手榴弾が投げ込まれました。空からは「鉄の暴風」と呼ばれたほどの凄まじい爆弾投下と砲撃をうけ、多くの死傷者が出ました。

住民の44.6%が犠牲に

浦添の住民は陣地づくりの作業にかり出されたり、弾薬を運ぶ役目を負わされたりと日本軍兵士の手伝いを強制的にさせられました。また、住んでいた屋敷を兵士に無理やり追い出されることもあり、その結果、多くの住民が逃げ場を失い命をおとしました。当時、浦添の人口は約9,200人でしたが、そのうち戦争で亡くなった人は4,112人で、実に44.6%の住民が犠牲者になりました。

■戦災実態調査票（浦添村全体）

	世帯数	家族数	戦死者	戦死率	一家全滅	一家全滅率	戦死者 無世帯	戦死者 無世帯率
	戸	人	人	%	戸	%	戸	%
仲 間	125	503	278	55.3	41	32.8	20	16.0
安波茶	60	209	134	64.1	26	43.3	1	1.7
伊 祖	111	555	181	32.6	19	17.1	20	18.0
牧 港	163	669	259	38.7	34	20.9	48	29.5
港 川	48	226	97	42.9	5	10.4	10	20.8
城 間	278	1,155	425	36.8	55	19.8	77	27.7
屋富祖	96	339	139	39.8	24	25.0	32	33.3
宮 城	126	437	228	52.2	40	31.7	25	19.8
仲 西	55	214	40	18.7	7	12.7	24	43.6
小 湾	82	301	108	35.5	17	20.7	28	34.2
勢理客	55	248	81	32.7	8	14.5	16	29.1
内 間	77	307	97	31.6	17	22.1	25	32.5
沢 岨	135	646	272	42.1	31	23.0	27	20.0
経 塚	96	339	191	56.3	24	25.0	32	33.3
前 田	201	934	549	58.8	59	29.4	24	11.9
西 原	269	1,559	773	49.6	46	17.1	39	14.5
当 山	49	229	126	55.0	11	22.4	4	8.2
大 平	51	262	139	53.1	11	21.6	3	5.9
合 計	2,077	9,132	4,117	44.6	475	22.6	455	21.3

参考資料

「浦添市史(第5巻・資料編4／戦争体験記録)」(編集:浦添市史編集委員会／発行:浦添市教育委員会1984年)

「広報うらそえ (2005. 10. 1)」

6. 市内の戦跡（ガマ）

市内の戦跡は平成17年8月現在、41カ所が確認されています。分布図を見ると、主に字伊祖から字沢岬にかけての丘陵地に多く見つかっています。その内訳は、下の表に示すように、「壕」が40カ所、「トーチカ」が1カ所です。

<形態>

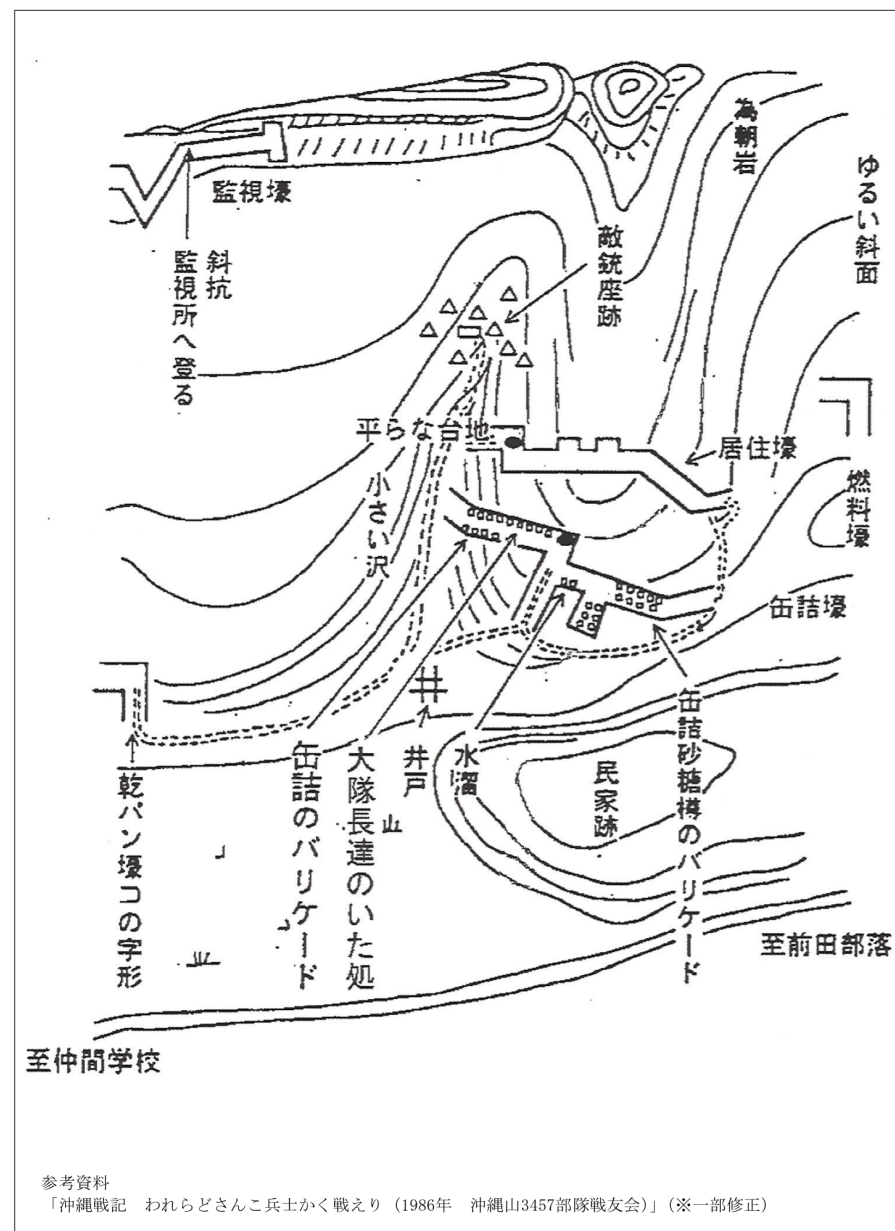
- 「壕」は、爆撃や銃撃を避けたり、敵から身を隠すために使用された地下の穴であり、方言で「ガマ」と呼ばれる自然の洞穴を利用したものを「自然壕」といい、トンネルのように横穴を掘って造られたものを「人工壕」と呼んでいます。
- 「トーチカ」は、コンクリート製又は岩盤をくり貫いて構築された箱型の陣地であり、外に向けて小さな銃眼等が設けられています。

<種別>

- これらの「壕」は、住民が避難した「住民避難壕」や日本軍が使用した「陣地壕」等があります。

種 別	形 態				総 計
	自然壕	人工(一部 自然)壕	人工壕	構築物	
壕	4	10	27	-	40
住民避難	4	1	2	-	7
住民避難＋陣地	-	2	-	-	2
陣地	-	5	21	-	26
不明	-	2	4	-	6
トーチカ	-	-	-	1	1
総 計	4	10	27	1	41

（浦添市文化課資料より作成）



参考資料

「沖縄戦記 われらどさんこ兵士かく戦えり（1986年 沖縄山3457部隊戦友会）」（※一部修正）

7. 各戦跡（ガマ）の紹介

浦添城跡南側斜面壕群

所在地：
前田（国指定史跡浦添城跡内）

形態：人工壕 ／ 種別：陣地

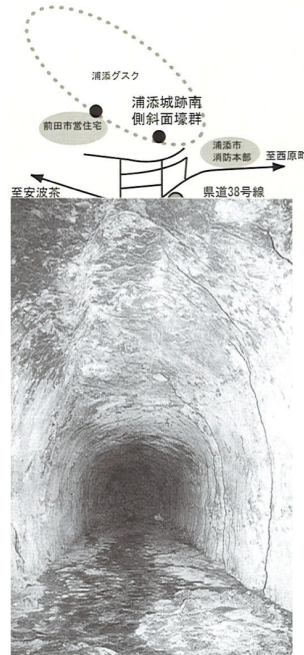
【概要及び特徴】

浦添城跡南側斜面には多数の陣地壕が構築されていたと思われるが、現在確認できているのは3ヶ所のみである。1944年8月19日以降に中部戦線の防衛陣地の1つとして、第62師団独立混成第63旅団が構築したと思われる。

各壕は、乾パン壕、兵員壕、糧食壕と呼ばれている。兵員壕と糧食壕は比較的隣接しており、これらの壕から西側に進んだところに乾パン壕がある。

乾パン壕は、浸水が激しくあまり奥まで入ることができない。他の壕は乾パン壕より比較的規模が大きく残りが良く、坑木跡、棚なども残っている。

4月26日、米軍が城跡の東側から城跡南側へ回り込みはじめた。同日、歩兵第32連隊の1個大隊が当城跡の陣地へ配備された。4月30日、第32軍は、米軍に対する攻勢に出ようと全軍に命令を出すが無功、5月5日、当地の部隊は逆に壕内に閉じ込められることとなる。翌日、浦添城跡は完全に米軍に占領された。



坑木跡の残る壕内



陣地壕内部



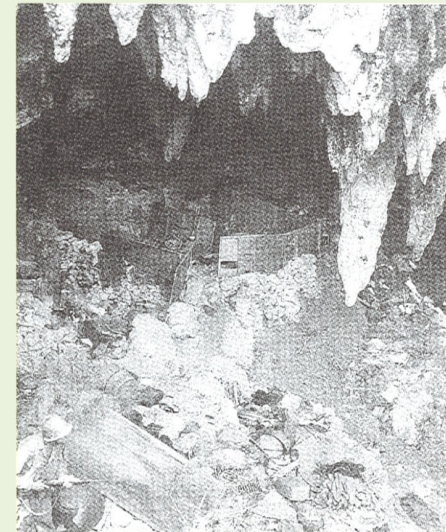
棚状遺構

参考資料

「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅱ)-中部編-」(平成14年3月、沖縄県立埋蔵文化センター)

■戦跡（ガマ）の紹介

名 称	所在地	主 別	形 態
浦添城跡南側斜面壕群 (乾パン壕、糧食壕、兵員壕)	前田	陣 地	人工壕
前田高地壕群	前田	陣 地	人工壕
ディーグガマ	仲間	住民避難+陣地	人工（一部自然）壕
仲間の住民避難壕群 (シーマヌウタキ、6班の壕)	仲間	住民避難+陣地	人工（一部自然）壕
伊祖のトーチカ	伊祖	トーチカ	構築物



日本軍が立てこもっていたガマ（自然壕）



宜野湾市の嘉数高台のトーチカ(陣地)



仲間後原の陣地壕（人工壕）

■市内の戦跡（ガマ）

